えた。

平均気温、年間降水量、不照日数は直接の関係がないように思われるが、5・6月降水量は捕獲数の変動とかなりよく一致する。これは雨が多いと産児が胎膜を破りやすいためといわれる。しかしなお検討すべき点もある。最大積雪量は福知山と豊岡で差があるだけでなく、傾向が一致しない。イノシシ捕獲数とは豊岡における観測値の変動が一致する。雪日数は関係がないが、豊岡における20 cm以上の積雪日数は捕獲数の変動とよく一致する。これは但馬・丹後地域の狩猟が跡づけによっていること、雪によるイノシシの活動力の低下などに関係している。

長崎県のアカネズミ

兼松仁郎

(長崎造船大学工学部生物学教室)

長崎県低地ではアカネズミが最優占小型哺乳類であるが、高地ではヒメネズミ・ヒミズがこれを凌ぎ、スミスネズミも現れる。殊に多良岳自然林ではヒメネズミが圧倒的で、アカネズミは極めて少数である。アカネズミの繁殖期は、長崎市低地では11月から翌5・6月頃までで、五島ではこれより少し早く、逆に雲仙では少し遅れているようである。

アカネズミの頭胴長・頭骨基底全長など外部及び頭骨各部計測値を統計処理した結果、dead centreといわれる臼歯列間幅を含む頭骨諸部位では、終生成長する頭胴長などや、成長が早く停止する耳長・上臼歯列長などとは多少異なった生後成長を認めた。また、長崎市低地産のものと五島産のものとの間には、いわゆる気質的な相違が明瞭にみられるのに、各部位の大きさと成長では差はほとんど認められず、雲仙産のものに比べてともに一様に大型であり、従って、長崎市低地産アカネズミをも離島型としてよい一面も認められた。

太田川下流の潮間帯に着生する生物の分布について

新川英明 (広島女子大学)

太田川下流の潮間帯生物を調査し、次の結果を得た。

1. 潮間帯生物は、上流から次の順に出現し、それぞれ下流にむかって分布している。すなわち、ヒメカノコガイ、カワザンショウガイ、シロスジフジツボ、Enteromorpha, Scenedesms, マガキ、フトヘナタリ、コガモガイ、ヒメウズラタマキビ、ウミニナ、タマキビである。

2. ヒメカノコガイ、カワザンショウガイは猿猴川で観察できなかった。他の5つの川でも、部分的に生息していないところが多い。また、ウミニナとは、ほとんど共存していない。

3. マガキの分布状態は、1958年当時に比較してほとんど変わっていない。しかし一般に成育状態が悪く、付着密度も低い。それは特に猿猴川において著しい。

4. 川口近くにおいて、フトヘナタリは中層に、ウミニナは下層に生息している。

カラマツガイ *Siphonaria japonica* の生殖について

澄川精吾 (福岡女子大学生物学教室)

Siphonaria japonica の生殖については、安部(40)が浅虫で5月～7月に産卵を見ているだけで1年を通じての生殖活動は余り知られていなかった。1968年2月より福岡市効外志賀島の材料で、ovotestis, hermaphroditic duct, spermooviduct, fertilization pouch, spermatheca についての周年の組織切片より次の事を知ることが出来た。

① genital duct は *S. hispidula* (Marcus, '60) と同じく spermooviduct 1本である。② spermatogenesis の開始は9月で、oogenesis は12月にはじまる。③ 最も ovotestis が肥大するのは2, 3月である。④ mating は数回行われ3月～5月が盛んで、交換した sperm は tail をつけたまま受精室に達する。⑤ 受精室は普通1コの盲のうであり、その入口では hermaphroditic duct からの通路と spermooviduct からの通路とが交叉し、その間に隔壁が見られる。このしくみにより自分の sperms と交換した sperms との使い分けが行われると推定される。⑥ 産卵は5月が盛んで6月に終る。